



学んだことを活かしてユニセフへ、そしてシエラレオネへ

シエラレオネ事務所の根本さんに、現地での仕事や生活、また、ユニセフで働いて感じたことなど、いろいろな質問に答えてもらいました。進路学習などにご活用ください。

©UNICEF/Mieh Nemoto

シエラレオネでの仕事について

Q シエラレオネ事務所へ赴任されて1年半が経ちました。実際にお仕事をされてみて、いかがですか？

A シエラレオネ事務所では、子どもの保護担当官として仕事をしています。「子どもの保護」という切り口で、さまざまなレベルの人たちと接する機会があり、大臣や各省庁の役人と子どもに関する政策について議論をすることもあれば、実際に援助を受ける子どもたちの中に入っていき、彼ら彼女らの声に耳を傾けるといったこともします。

シエラレオネは、よく「5歳未満の子どもの死亡率が最も高い国」と紹介されますが、実際にシエラレオネにいと、それが単なる統計上の数字の問題ではなく、ひとりひとりの子どもの生きたストーリーとして心に迫ってきます。特に、内戦中に子どもたちの身の周りで起こったおびただしい暴力に関する話は、時には耳をおおいたくなるほどです。ここにいると、ユニセフの支援を必要としている子どもたちの存在の大きさを肌で感じます。

Q ユニセフに集められた募金によってどんな成果があがっているか、具体的に教えてください。

A シエラレオネでは、内戦中や内戦直後の緊急支援の際、各国から集められた募金が、子どもに対する予防接種のためのワクチンや、スクール・キット（ノート、鉛筆など）の購入代金、元子ども兵士の一時収容施設の建設資金などにあてられました。その結果、内戦中もポリオやコレラの発生を最少限に抑えることができ、国内避難民となった子どもたちも避難民キャンプの中で勉強を続けることができました。また、約6,800人の元子ども兵士が社会復帰のためのプログラムに参加することができました。



子どもたちから直接話を聴くのも重要な仕事

©UNICEF/Mieh Nemoto

最近では、日本からの資金で、シエラレオネでも特に戦争の影響がひどかった3つの県で、1歳未満の子もたちと妊産婦、約10万人に、マラリア予防のための特殊な蚊帳を配布することができました。村々にモニタリングに行った際、実際にその蚊帳を使って生活をしている子どもたちや母親を見て、とてもうれしくなりました。



モニタリングのためフィールドへ
©UNICEF/Mieh Nemoto

Q 仕事をしていて良かったと思ったのはどんなときですか？

A 内戦の影響からか、周囲に心を閉ざしてしまっていた子どもたちが、カウンセリングや教育、レクリエーション活動を通じて、次第に笑顔を取り戻していくのを実感できた時です。また、トレーニングを受けた政府やNGOのスタッフが、学んだことを実践して、独り立ちしていく姿を見た時も感激しました。

Q 現在の仕事はどんなところが難しいですか？

A ユニセフが子どものために何かをしようとする、それによって利害がからむ人たちや、人権をそこなうような伝統文化を重んじる人たちから、批判や反発を受けることが多々あります。こうした利害の対立を調整し、みんなの同意を得られるような方向性を探っていくというのは非常に難しいことですが、これは国連という中立的な立場で、かつ子どもの保護を担うユニセフにしかできない仕事でもあるので、やり甲斐があります。

Q シエラレオネでの生活で困ったことはどんなことですか？

A 紛争後、首都ですらインフラの整備が立ち遅れ、電気や水の供給状態が非常に悪いなど、生活環境が非常に厳しいことです。電気は1週間に1晩来るか来ないかという状態なので、発電機が不可欠です。断水もしばしばあります。国内出張の際には、水や食糧持参が原則です。

ユニセフ職員になるまでの道のり

Q 大学ではどんな勉強をされましたか？

A 大学時代は法学部で国際法や国際政治を専攻し、国際人権法や難民問題を中心に勉強をしました。その後、人道援助と開発援助のギャップの問題に関心を持つようになり、より実践的な学問を学ぶために、アメリカの大学院に留学しました。大学院では、開発行政と国際関係を専攻し、紛争後開発における女性や子どもの保護のためのプロジェクトの計画や管理について研究をしました。

Q 卒業後はどうされたのですか？

A 大学院卒業後は日本に戻って民間企業に勤めていたのですが、その頃、「9.11」事件があり、アメリカ軍によるアフガニスタン攻撃、そして、それに引き続くアフガニスタンへの緊急援助が始まりました。メディア等を通じて、ユニセフなど国際機関が活発に援助活動をしているのを見聞きするうちに、大学や大学院で勉強した人道援助や開発援助の分野で働いてみたいという思いが募り、日本ユニセフ協会の広報室に入りました。さらに、途上国の現場での活動に携わってみたいと思うようになり、ユニセフの職員になりました。

Q ユニセフを希望されたのはなぜですか？

A ユニセフに惹かれた一番の理由は、国連機関の中で唯一、人道援助と開発援助の双方の分野で活動をしている現場志向の機関だからです。そして、世界中どこでも社会の中で常に弱い立場にある子どもとその権利を守るという非常に明確な使命を持っているところにも惹かれました。

国際公務員になるために

Q ユニセフ職員として必要なことはどんなことですか？

A 国際公務員になるための特別な準備はしませんでした。毎日、新聞やテレビで世界の動きに目を配ったりしたことは役に立っていると思います。また、英語で業務をすることになるので、語学は真剣にやっておくべきです。特に、相手に簡潔に要点を伝えるコミュニケーション能力や文書作成能力は必須です。また、機会があれば、国際公務員に実際の業務内容について聞いておくのも良いでしょう。

個人的に今でも心がけているのは、「好奇心を失わないこと」です。世界各地を転々としながら、多国籍のスタッフや現地の人々と一緒に仕事をすることになるので、常に新しい環境や発見を楽しんでいく姿勢が大事だと思います。それから、心身ともに健康であることも大切です。

日本の子どもたちへのメッセージ

Q 最後に、ユニセフで働くことを希望する日本の子どもたちへメッセージをお願いします。

A ユニセフが活動する開発途上国、特にアフリカは、日本からは非常に遠い存在です。でも、まずそうした国やその国に暮らす人々について知ること。そして、その国の将来を担う子どもたちについて考えること。そこから始めてください。重要なのは、そうした国々の人の立場に立って、その人たちの目線で物事を考えてみることです。それから、小さなことからいいので、自分に何かできることはないかを考えてみてください。

シエラレオネでの生活 1日のスケジュール



6:30 起床



8:00 セクション・ミーティング

9:00 細々とした業務の処理、ミーティングの準備など



10:00 政府、NGO、国連機関などとのミーティング



13:30 机の前で仕事をしながらランチ

14:00 モニタリングのためフィールドへ

スタッフや子どもたちにインタビュー
プロジェクトの進捗状況をチェック

17:00 本部に提出するレポートの作成、書類のチェック、資料の熟読など



19:00 オフィスを出る



19:30 帰宅し、夕食を作る



22:00 就寝

(電気の無い時。)

それ以外の日は就寝は0:00以降)



休日は友だちと持ち回りで各出身国の料理を作ったりして過ごします。
©UNICEF/Mich Nemoto